

處ではどうすることも出来ない。それに雨が降りさうだから……』
と、僕はK君を勵まして、二貫目近い寫真機の函は自分で持つてや
り、ユツタリユツタリ登つて行く。

幸ひな事には木立が小さくて、空の薄明が見えることであつた。
若し、鬱々たる大樹の間を辿るのだつたらどうだらう。然し、山腹
の青葉を渡る夜風がサヤ／＼といふのを聞く物凄さ、まるで怪
談を聞きながら想像した深山の景をそのまゝである。

あの音は、大蛇が峯から峯を亘つて此方へ迫るのではあるまい
か。さう思ふと、覺えず全身の毛穴が慄然としてすぼまる。さう
だ、名だゝる函嶺の暗夜でさつて見れば、如何なる猛獸毒蛇が出や

うも知れぬ。かねて冒険小説を読んだ際、どんな猛獸でも燃える火
を恐れると書いてあつたのを思ひ出し、徑のほとりに枯草のある毎
に、それを掻き集めて小脇に抱へた。それは、萬一怪しきものが出
て来た時には、之れに火をつけて難を免れやうといふ用意である。

K君は又ぶツ倒れた。ヒー／＼といふ響きが、其の呼吸につれて
聞えて、如何にも苦しさうだ。

『あゝ咽喉が焦げつくやうだ。水がほしい／＼。』と、夢中になつて
叫ぶ。

僕も其の傍にグツタリ腰かけて、冷たい汗の額に流れるのを拭き
ながら、思はず太息をついた。

若しK君に此處で病氣になられたらどうするであらう。斯かる場合に、よくある心臓麻痺を起したらどうしやう。斯う思つた時、僕は泣き度くなつた。

K君はグツタリ萎えた體を大地に投げて、例のゼー／＼ヒー／＼といふ音をさせてゐる。

と、耳についた幽かな響きがある。

チ、ポタ！ チ、ポタリ！

最初は蟲の鳴くのかと思つたが、尙ほよく耳を澄ませば、どうやら水の滴るのらしい。しめた！とばかり其の幽かな音を便りに探り寄つて見ると、突出た木の根の下が洞窟のやうになつてゐて、其の

根もとから、水が少しづつ滴るのであつた。

「お、K君！水が、水がある！」と、僕が叫んだので、それまで死んだやうになつて居たK君も、ヤヲラ身を起して、ヨロ／＼とよるけながら其の木の根方に近づいて、しめた土に口をつけるやうにしたが、飲まれる程は滴らない。唯だ僅かに戀しい水の香を嗅いだに過ぎなかつた。

「駄目です／＼。」と、暫時の後、K君は思ひ切つて元の處へ引かへした。然しいつまでも斯うしては居られない。せめて峠の茶屋まではと、澁るK君を勵ましつ慰めつ、少し行つては休み／＼して登るのであるが、峠の峯は依然として頭上に仰がれる。

「あれ、もうあんなに近づいた。」と、口ではいふものゝ、いつになつたらあの峠へ登りつかれるやら、其の心細さと云つたらない。それでも兎に角峠まで登りつめた。茶屋が寝て居れば叩き起しても、水を一杯飲ませて貰はう、飯の残りでも乞食うと、そればかりを心だのみにして。

アラス！何といふ情ないことだ。茶屋はあるにはあるが、雨戸は固く鎖されて、叩いても呼んでも返事があらばこそ、仔細に點検するに、人の寝てゐる氣配もない。さては、晝間だけ此處に店を張つて、夕方早々麓の家へ歸るのであらう。

二人はガツカリして又其處に腰を下し、夏草の上にゴロリとなつ

た。山嶺の夜は静かに更けて、仰げば雨雲の行きかひ急しき間に、糠星がチラ／＼と愛らしく覗く。

僕は一息入れて後、徐ろに之れから下りて行かうといふ箱根仙石ヶ原方面を俯瞰した。暗澹たる闇の底に、濛々たる白霧が沸いて、まるで身の雲上にある想ひがする。

一步誤れば奈落の底に落ちるやうだ。いつそ此處に野宿しやうか。いや／＼、そんな弱音を吹いては、K君は此のまゝ病みついてしまふかも知れぬ。——まだ、行脚の第一日ではないか、前途遼遠なる此の行を、第一日にしてクタルのは餘りに意氣地がない。たとひ宿について一日や二日動かないやうでも、茲て倒れてはなら

ぬ。斯う決心して、厭がるK君をせき立て、やつと下り坂に向つた。

一寸先は闇である。僕は左手に重い寫真機函を提げ、右手にもつた蝙蝠傘を探り、先に立つて一歩又一歩、危く下つて行く様を晝間見たら、どんなに滑稽であつたらう。然し、僕等は一生懸命である。一足踏み誤ると、忽ち身は千仞の谷底に轉げ落ちてしまふぞと思へば、全身の神経は極度に緊張して、疲勞の割合には足元も確かである。

けれども、何をいふにも不知案内の夜の嶮路である。ともすれば巖角に躓いたり、茨の中に踏み込むのはまだしも、ツルリと雨上り

の粘土に滑つて、スツテンコロリと轉げた事も一再ではなかつた。「あゝ、所詮駄目だ、此のまゝ夜の明けるのを待たうかしら。」と、流石の僕も悲觀せざるを得なかつた。

といふのは、今までは草木に埋れてはゐるが、正しく小徑を辿つてゐたのである。然るに、此の時、其の小徑はハタと盡きてしまつた。透して見ても、あちこち歩いて見ても、唯だ茫々たる草野原であるのだもの。

一體もう何時だらう、懷中時計を出して、空の薄明りに透して見ると、もう十二時近くである。此の山にさしかゝたのが五時であつた。あれから七時間も山路をウロ／＼してゐるのだ。二時間で樂に

越されるところを、七時間もかゝつて、まだ迷つてゐるとは、愈々以てをかしい。さては狐狸の仕業ではあるまいか。二人はもうへたくしに疲れ、心氣も茫乎して、まるで夢のやうである。——互ひに黙り込んで、唯だフラ／＼とさ迷ひ歩く。他所から見たら夢遊病者が狐つきのやうであつたらうと思ふ。それでも、いつの間にか、遙か谷底に見えて居た人家の灯が、略眼平に見えるやうになつた。それで居て容易に人里に出られない。モドカしい、ジレツたい、身に空飛ぶ羽のないのをどんなに恨んだらう。

『五』 蟬時雨

仙石村の人家のある處へ出たのは、翌日午前一時近くであつた。二時間を越せるところを八時間もかゝつたのである。薄暗い軒燈の光で旅人宿の看板を見つけて、トン／＼とトン／＼と雨戸を叩いた。やがて窓の戸が少しあいて、『だれだね。』と、いふのは老婆らしい。それで僕は痛む足を引ずりながら窓下に近づいて、峠路を踏み迷つた次第を述べて、一夜の宿を哀願に及んだ。聞き終つて一旦引ッ込んだ老婆は、今度は入口の雨戸を開けて二人を内に導いた。僕は物も云はず、荷物や上着を投げ出して上り框へゴロリと横になつた。やがて、微温くなつた風呂に入り、上つて来て干魚の炙つ

たので茶漬をかき込んだ時の美味さと云つたら！
其の夜は二階の八疊で蚊帳も吊らず、グツスリ夢もなく寝てしまつた。

翌朝は疲れてゐる癖に早く眼がさめた。椽に出て欄によつて向ふを見れば、折々白雲が山腹を掠めて過ぎる。

「あすこが地獄谷です。」と、顔を洗ひに降りた時、宿の主婦が指して説明した。そして、宿の裏手へまはると、近く面を掠めて聳ゆる山脈がある。

「あれ、あの少し凹んだところが乙女峠ですよ。あすこに小屋のやうなものも見えませう。あれは峠の茶屋ですけれど、夜は誰れも泊

つて居りませんや。」

それから此の宿の村まで、随分急勾配で降つて居る小徑が、草原の間に幾條となく見える。

「あれだ、あれだ、僕等が昨夜散々迷ひ歩いたのはあれなんだね。」

二人は恨めしいやうな、嘘のやうな一種云ひやうのない感情を懷きながら仰ぎ見るのであつた。

顔は背戸を流れる小川で洗つた。清冽にして底の小石も數ふべく、冷やかにして久しく手をつけて居られない。しかも時は猛夏八月の上旬である。昨夜蚊帳を吊らなかつたのも尤もである。

貧しい朝飯を終つて、痛む足をいたはりながら、旅装をととのへ

て居る時、巡查さんが何やら戸毎にふれ歩く、何事かと思へば、當時箱根底倉の古河男爵別邸に御避暑中の東伏見宮及び同妃兩殿下が御散歩の爲め自働車で此の前をお通りになるによつて、二階から覗いてはいけないとの通達であつた。

そこで、我々も下に降りて兩殿下を奉迎した。雑誌の口繪などで見覚えのある妃殿下は、いつも美しく、沿道の者に一々御會釋を賜はつた。

御自働車を、遙か彼方の上の道へ御見送りして、僕等はブラーと川に沿うて下つて行く。

潺々たる溪流を隔て、聳立する奇峯絶壁には、夏山の緑滴るが

如く、流石天下に名だゝる景勝の地と、昨夜とはまるでちがつた、悠々たる觀光の客の氣分を以て景を賞するのであつた。

昨夜以來、戀命の苦しみに際會して、暫く影も潜めて居た風流心が、又ポツ／＼と頭をもたげ出した。

銚子ヶ鼻といふ處にかゝやかな茶店があるのを幸ひ、茲に數時を或は床几に横はり、或は茶を飲み菓子をつまんで過した。此の店の主人、老齡既に白髮白髯をよそほひたるが、月並俳句をひねる。そこで、僕も負けぬ氣になり、駄吟數句を手帖の端に書きつけて翁に示す。

高原を霧走るなり夏燕

溪流に掻き消され〜蟬時雨

涼しさや切通岩に踞して流聞く

絶壁の途中に一叢すゝき哉

白霧の折り〜過ぎて蟬時雨

坦々たる街道を下つて箱根底倉に出づ、昨年の行脚には、此處の某旅館を根據として盛んに活動したものだ。思出は流石になつかしい。て、此のまゝ素通りして山を下るに忍びず、底倉と直ぐ續いて居る宮の下の龍雲館といふに立寄り、一杯湯を浴びて晝飯をしたゝめる。

その間に、昨年の思ひ出を少しく語らせて貰はねばならぬ。

『六』 思ひ出のエピソード

箱根は御承知の如く、小田原から電車で先づ湯本に行くのが順路である。此處は箱根の起點だと云ふ事が出来る。湯本と隣り合つて塔の澤がある。此處には東京あたりの名士の別荘も少くない。それから人力車や自働車に乗れば、一時間乃至二三分にして、箱根中第一の繁榮地たる宮の下に到着する、其所は餘程地勢も高く、風景佳絶、温泉澄徹、氣候冷涼、まことに類まれなる避暑地である。此所には御用邸もあり、貴顯富豪の別荘も多く、外國人相手の堂々たる旅館も少くない。中にも富士屋ホテル、奈良屋等が最も大さ

底倉は、宮の下から少し先に行つたところであるが、其の名の如く谷底のやうな感じのする處である。それが爲めに溪谷の眺め、迫れる山勢の奇景を欄によつて望むことが出来るのである。

宮の下、底倉から遙かに隔つた處、即ち箱根の最も上に位するところに蘆の湯である。之れは有名な芦の湖畔にあり、渺々たる湖水を隔て、離宮を望む風光は頗るよいが、便利が悪いので客は少いといふことである。

いや、之れではまるで箱根案内だ。——さて、話は後に返つて、昨夏の思ひ出に移る。

底倉に宿をとつた僕等二人は、雨雲の徂徠急なる空と睨み合ふ事

一日半、我慢に我慢をかさねたが、所詮じつとしては居られない。晝飯をすますと、小降になつた雨を冒して、先づ兎も角も宿の番傘を借りて飛び出した。

聞けば、此處から七八町ばかりの處に強羅といふ温泉地があり、其處に強羅公園があるといふので、そこへ行つて見る。大雨に洗ひさらはれた道は大石小礫がゴロ／＼と轉がつて、まるで河床を歩かやう。之れが公園に行く道とはどうしても思はれぬ。

然し、公園に行つて見て驚いたのは、其の設計がスツカリ西洋式で、中央に噴水まで設けてあることだ。東京あたりでは到底見ることの出来ぬ大石巨巖を自由に使用して作つた園内の布置鹽梅、それ

に白百合が時を得顔に芳香を放つて、全山を其の香に充たして居るのも面白いが、更らに嘆賞に價するのは、其の巨巖によつて見渡した四望の壯麗雄大な事である。

茲に思ひ出す一つのエピソードがある。――

強羅公園で記念撮影をすますと、石コロ道を横に小涌谷へとまはつた。此處には三河屋ホテルといふ大きな旅館があつて、夏期は東京からの避暑客で一ぱいになる。其の他別荘も數ヶ所あり、便利は悪いが、地の閑静なので喜ばれるらしい。

例の大ホテルの前まで来た僕等は、一寸立寄つてお茶一ぱい飲まうかどうしやうかと相談したが、うまくもない菓子を一つ食べて大

枚の金をとられるの愚をなすより、如かず、其の近所の餅菓子屋に立寄つて一つ五厘の大福をウンとつまゝんにはと、相談一決して三河屋ホテルを後にした。そして菓子屋でタラフク腹をつくり、いざ歸らうといふ時、たらく坂一つ降れば千條の瀧といふのがある。聞き、ては行つて見やう、そして箱根記念に其の瀧も寫しておかうと、勇んで出かけた。

程なく瀧の下まで行つたが、千條の瀧が聞いて呆される、東京淺草の奥山ならば知らぬこと、僅々三四間の絶壁から水がジャラ／＼と落ちてゐるではないか。なるほど巾は十二三間もあつたらう。が、水量も少く、高さは今いふ三四間、之れなら東京の市中でも模

造が出来さうだ。

然し、まア折角来たのだからと、K君を促がして寫眞機を組み立てさせた。と見ると、瀧の掛茶屋の庭に今を盛りと白百合が咲いて居る。突嗟に思ひついたのは、其の白百合を瀧水が突出した岩角にせかれて分れるあたりへ挿し添へて寫したならば、更に一段の興があらうといふ事である。

「待つてくれ給へ、僕が一寸細工をするから。」と僕は、茶屋の主婦に談判して、莖もたわゝに咲き盛つた百合の三四本を貰ひ受け、洋服を脱いでシャツ一枚となり、飛沫を肩して瀧壺に飛び込もうとするところへ、彼方の木かげから静かに歩み寄る一行がある。夫妻と

令嬢が一人の三人づれ、いづれは東京あたりから例の三河屋へ来て居る避暑客であらうとは想像されたが、何所の誰れとも分らない。

三人づれは悠々と近づいて、床几に腰をかけ、茶屋の主婦の勧める澁茶を啜りつゝ、静かに瀧を見るのであつた。其の様子が唯人ではないと察したので、僕はK君の袖を引いた。

「あれは屹度名流だぜ、寫さうぢやないか。——僕はこんな風をして居て困るから、君、僕のポケットから名刺を出して、あの人もつて行つて頼んでくれ給へ、一寸此の瀧をバックにして寫されるやうに位置を變つて貰うやうに……」

斯ういふと、K君は頷いて早速件の紳士に申込んだ。すると意外に早く承諾されて、兎も角一枚カチリとやつた。

さて僕は白百合を抱へて暫く其處に躊躇してゐたが、此の時意を決して瀧の飛沫を冒し、岩角を攀ぢて白百合を此處其處に挿した。

挿し終つて降りて來ると、百合の花粉が顔から腕や胸のあたりにベト／＼と黄色な斑點をつくつて居る。

「やア、大變だ、顔なんかまるで黄色ですよ。」と、K君が注意してくれたので、慌て、瀧壺で洗つたが、花粉には油氣が強いので水ではとれない。

さア愈々大變と、茶屋に行つて石鹼を借りて來るといふ騒ぎ。

此の有様を笑ましげに見て居た三人づれの一行は、やがて立つて又静かに元來た道を引かへして行く。

「あゝ君、一寸あの方のお名前を聞いておいてくれ給へ。」と、僕は慌て、K君に囁いた。

K君は心得たりと追ひすがり、

「失禮ですが、あなたは……………」

「二條だよ。」

「すると、あのどちら様で……………」

「赤坂。」とばかり、軽く云つて其のまゝ後をも見ずに行つてしまはれた。

それとK君に聞いて、初めて彼の一行が公爵一條實輝氏と夫人及び朝子嬢であつた事が分つた。——やア飛んだ藝當をお目にかけてものだ、流石の僕も覺えず冷汗をかいた。

「七」 湘南へ

思ひ出話の程は幾らもあるが、長くなるから、之れ位にしてお

く。
さて、今、晝飯を認むべく陣取つた龍雲館といふのは、其の名の雄々しく勇まじし點、先づ田舎者の度膽を抜くに足るものあり。但し、家は街道から急坂を溪流の方へ一町あまりも下つたところの木

立の蔭にあり、坂に沿うて座敷を造り、それがすべて五段になつてゐる。

温泉宿の座敷五段ありて木槿咲く、飯を終つて少憩の後、人車を呼んで湯本に下る。急勾配の坂路を一瀉千里の勢を以て飛ばせたので、程なく湯本の電車發着所に着く。丁度今發車するところなので慌て、飛び乗る。

之れから、小田原から湘南各避暑地の行脚に移る。片瀬では嗟峨侯爵家の歡待を受け、江の島では巡查さんに危く種板を沒收されんとし、更らに三浦半島に足を延ばしては、葉山にて宿るに家なく、怪しき按摩さんの家に入り込み、蚤や虱にくるしめられて、苦しさ

一夜を明したといふやうな奇談怪話も少くないが、あまり長びくは却つて讀者諸氏のお退屈と、此の邊で筆を擱く。

◎日光より中禪寺へ

西川君、私が見送られて、上野から那須野の別墅にゐる友の許へ旅立つてからも餘程になりませぬ。そして、私は其間心ゆく迄に那須温泉に鹽原にさては別墅を圍む松杉の森林に鹿の群を追ひ廻したり出来るだけ身心の安逸を貪り盡して漸くこの頃當中禪寺湖畔に参りました。あと二三日で久々て明い東京で御目にかゝつてお話し申す事を樂んで居ります。

月並ですが日光を拜見し豫定の如く失望した私は電車を馬返しに

捨てまして唯一人湖畔に向ひました。新道よりも舊道が近いと云ふので又一刻も早く湖畔に達したいために舊道をとりました。大きな圖體をもて餘した事は申す迄もありません。

馬返しから舊道に達する迄は大谷川の清い流が淙々として溪山の間に流れ所謂深澤の奇景をなして居ります。まことに兩岸迫つて今にも前山の倒懸せむとする如き光景は實に南畫以上です。大谷川を見捨てる所に女人堂がありそれから舊道を上ります。随分エライ思ひをして最初に望みました瀑は磐若、方等です。一つは小一つは大而してこの谷こそ日光山中最も紅葉の美を以て稱せらるゝと云ふ尙急な坂を二三丁、中の茶屋に達します。遙かに一條の瀟洒たる小

瀑があります、阿巖です。これより上るに従つて山愈々高く谿谷々深く遂に不動坂に達して全山の樹木が一變して高山植物帯となります、即ち大平と申すのはこのあたしです。この谿に有名な華嚴の瀑があるのです。

崖を削つてかけられた非常な危かしい機道に縋る思ひをしてズン／＼下ります、轟々と云ふ凄惨な唸り。何物の追従をも許さぬ響。それ等のものが全山を鳴動してゐます、鳴動のみてあたりは依然蒼蒼と茂つて居ります。そこに一層の怖しさを感ぜずには居られません、今はハヤどうでもよい一寸でもあの響の主に見えさへすればよい、心のみはやれど道はナカ／＼に危ふございます、白雲の瀑の飛

沫をあびながら、半夢心地で下り着きました所に一軒の茶屋があつて桃われの娘が澁茶をすゝめます、有名な五郎平茶屋がこれです。この茶店に入ると同時に目のあたり仰ぎ見る高さより一氣に瀑壺へ落下してる怪物。壯大と申さうか雄麗と云はうかあへぎ／＼上り恐る／＼下つた、疲れも何もかも一舉にして忘れ果てたゞ茫然と小一時間を望み見るために費してしまいました。瀑を望むには尙二箇處ある相です、が、もうこゝで澤山です、無想離念、能ふ限りこの瀑を私の脳裡に深く／＼印し込まふとしました。印しこみました、それは飽く迄も自然其者の偉大なる事でした。人間のする事なんて愚なものだと思ひました、自然！ 自然其者を主觀的に味はねばなら

ぬ、大きな瀑だ美しい山だ位じや駄目です瀑に捉はれる様じや駄目
今少し深く鋭くあつて欲しい 須く眼を見開いて然る後瞑目して見
なくちや駄目です。

華嚴を極むれば中禪寺はすぐです。道も平坦です、熊笹に圍まれ
た道を進み行くとそこに静寂な湖を見出します、東西貳里、南北
壹里、深く清く飽迄紺碧な冬さへ氷結しない魔の棲むてふこの湖、
男體山を背負ふて建てる幾多の旅館も却つて湖畔を彩るもの、一つ
です。

一浴颯爽、ビールの満をひいて湖上を望む私はこゝに再び自然
の最美を感じずには居られませぬ。南北壹里は最も廣い所に幅員で

近くは拾町にして達し得る對岸の青巒は波一つたぬ其面に緩く影
を投じて居ります、其動ない倒影に憎くやヨットの滑り行くも一興
です、若しそれ夕ぐれ雲の青巒を掠めて低く高く徂徠する面白さ、
次第に暮色こむる所、洋装佳人の彷徨ふに至つてはターナーの水彩
を見る心地せらるゝにも拘らず更に歐化しないのが何よりも嬉しう
ございます。

レーキサイドホテルを横に見て數町、先年の天災に對岸よりこゝ
に移して新に工成りしと云ふ朱塗りの殿堂があります、勝道上人
自作の立木觀音が安置されてゐます、像は一夜にして作られたと傳
へらるゝ甚だ穩健な手法になるもの。而して男體山の翠色と朱塗り

の殿堂、それ等が群青を溶せし様な湖面に映ずるの美観は得も云は
れませぬ。しかも尙其夜中秋の月を賞し餘りの幸運に喜び願て兄
の如き麗筆を有しない私が何よりも情なくなりました。(北の人)

あのお山戀し海戀し 終

昭和四年九月二十日 印刷
昭和四年九月廿五日 發行
あのお山戀し
海戀し

著者 西川他見男

著作權所有者
發行者兼印刷者
玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地



發行所

東京神田表神保町一〇番
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

